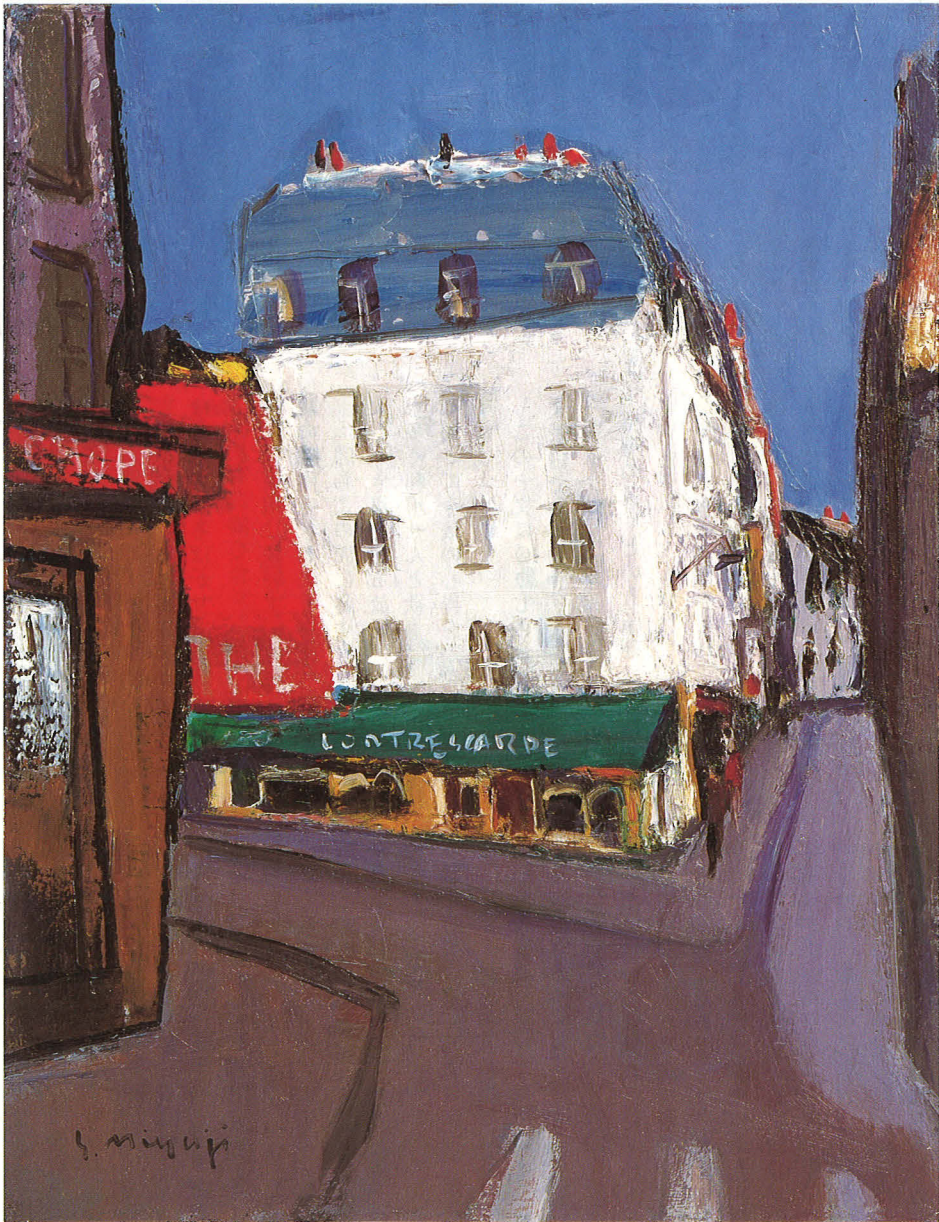


文化高知

'95年7月 NO.66



(財)高知市文化振興事業団

「パリの街角」宮地俊一郎

ICとQOL

—先覚者 中江兆民—

澤村 榮一

この標題は、日ごろ医療問題に關心のない方々にとっては、まるで判じ物であろう。これらの横文字は、それぞれ、「インフォームド・コンセント」と、「クオリティ・オブ・ライフ」の略語である。

ICは、通常、「説明と同意」と訳されているが、医師は患者に医療の内容を十分に説明し、患者も疑問点は遠慮なく質問しながら、治療方針を決定してゆく共同作業のことである。

本年四月の日本医学会総会においては、初めて「人間性」が主テーマに掲げられ、ICや尊厳死など、医学の社会的問題について見詰め直す企画が前面に押し出されたという。

五月に公表された「厚生白書」の副題も、「医療—質、情報、選択そして納得」であった。この白書で「医療」がメイン・テーマとして取りあげられたのは初めてのことである。

り、その力点の一つはICにおかれている。

行政も医療界も遅ればせながら、患者の声に耳を傾けはじめたのは、まことに喜ばしい。

ところが、すでに一世紀前にICを実践した土佐人がいた。自由民権運動の先駆者として知られる中江兆民である。

「余一日堀内を訪ひ、あらかじめ諷むことなく明言してくれんことを請ひ、因てこれよりいよいよ臨終に至るまでなほ幾何日月あるべきを問ふ」(中江兆民『一年有半』)。

喉頭ガンにおかされた兆民は、大阪の医師堀内謙吉に自ら請うて、余命「一年有半」であることを知った。ときに兆民五十五歳、明治三十四年(一九〇一年)四月のことである。

厚生省が昨年十月に実施した調査

によると、ガンで死亡した患者のうち、病名告知をうけていた者は五人に一人にとどまっている。また、医師から治療方針の十分な説明を受けた患者は、四割強に過ぎない。このようなデータを見るにつけても、時代を百年も先取りして、自ら進んで告知を望んだ兆民の冷徹な潔さには頭がさがるばかりである。

先の引用に続いて、兆民は告知要請の理由を次のように述べている。「即ちこの間に為すべき事とまた樂むべき事とある故に、一日たりとも多く利用せんと欲するが故に、かく問ふて今後の心得を為さんと思へり」。

この一文はQOLの本質のみごとな表白である。「クオリティ・オブ・ライフ」という言葉には、当初、「生命の質」という生硬な訳語が当てられていた。最近では、「中身の濃い生活」、「充実した人生」などと訳されることが多い。ガンが進行し続けても、症状コントロールを適切に行えば、患者はQOLを高める



ことができる。つまり、生活の幅を広げ、生きがいを感じながら、残された日々を「一日たりとも多く利用」することができるのである。兆民も、『一年有半』を刊行し、さらに『続一年有半』を短時日で脱稿・上梓して、「為すべき事」を為しとげた。また、この間に能うかぎりの「樂むべき事」を楽しんだ。とはいふものの、異郷にあって叶わぬ願いもあった。「余が郷里松魚を以て名あり、…一息すること人にして垂涎に甚へざらしむ」「余が郷里また楊梅あり、今まさにその候なり」。兆民の望郷の思いが惻惻と胸を打つ一節である。

風薫る五月、「自分で決定する自分の医療研究会」による講演会や、「高知緩和ケア研究会」の設立総会が、あいついで催され、いずれも広いホールが満席の盛況であった。奇しくも、双方ともに、兆民ゆかりのテーマを考究する会であり、折しも松魚の句である。梅雨にはいれば楊梅が出盛る。私は兆民先生に思いを馳せ、先生の切望した肴菓を満喫できる幸せに感謝した。私も、他の疾患ながら、一度は旅立ちの告知をうけ、小康を得た体であるから。

(高知大学名誉教授
ささえあい医療人権センター会員)

須佐之男の国

新田 勘祐

拙著『地域の魅力化とCI計画』の中で、この須佐之男尊を企業や地域の個性とその現れ方の説明のために引用しましたが、今回は少し角度をかえて一個の人間として捉えてみたいと思います。

私が本格的に古事記を読んだのは今からちょうど九年前、ある雑誌の経営戦略についての連載を頼まれたときです。その当時私は「企業組織」や「地域」の個性の成り立ち、その個性の現れ方について研究していたのですが、それには主役である「人間」そのものについての理解を土台にしなければならぬという必要に迫られていました。それを私なりに模索している過程で古代史にいき当たり、考古学や神話などを読みあさったことがあります。その中の一冊に古事記があったのです。そこに登場する「須佐之男」は災禍の権化のように忌み嫌われる存在であるにもかかわらず、妙に私の心に残るものがあり

ました。

私が惹かれたのはもちろん「須佐之男」の凄まじい破壊力などではなく、ひとりの男としての側面でした。須佐之男には聡明にして美貌の姉がいました。いうまでもなく天照大御神です。須佐之男は弟として姉を深く敬愛しており、また「神」としての天照大御神に対してその威光に畏怖すらいだいていたのでした。

すべての生命の源ともいえる日の神は、あまねく人々の崇拜の対象であり、その存在は唯一無二のものであることはいうまでもありません。須佐之男は偉大な姉の力にくらべ、いかに自分が非力であるかを充分承知していたのです。この人間的コンプレックスが私に共感を与える要因の一つだったように思われます。須佐之男の行状は彼の志とは裏腹に狼藉をきわめます。というより思慮というものがまったく無いかと思われほどの乱行ぶりが現れます。この

点を神話では「荒ぶる神」すなわち「台風」の具現者としてとらえているのです。しかし須佐之男は心の中では姉を愛し、人々からも愛されることを強くのぞんでいるのですが、「姉上」と呼ぶその声は天を揺るがし地を真つ二つに両断せんばかりの大音声(雷)となるのです。このように彼の無垢の声は姉に対する敬愛の念や、人々への愛情を表すには適しているとはいえませんが。



しかし須佐之男は、こうした自分の欠点を少しも隠そうとはせず、まして人々に媚びたり、言い訳をしようなどとはとうてい思いもしません。なぜなら彼の声は素直な心の表れだし、その表れ方を人々がどのように受けとめ評価しようが、彼は自分の言動には微塵も非はないと固く信じているからです。こうした須佐之男の態度はまさに「男の原型」そのものといつてよいでしょう。この点も私が須佐之男にひかれるもうひとつ

の理由です。

この神話は、ほとぼしる男の心情とあまねく人を包み込む女の優しさの物語ということもできなくはないでしょう。しかし、繊細な都会人と、一見粗野に見える地方の人の純情との対比、あるいは自分と他人という具合に少し置き換えてみることもできそうです。この場合は「カルチャー・ショック」といわれる現象となり両者の心を傷つけずにはおさまりません。

地方の時代といわれて久しいのですが、このジレンマを都会人も地方の人もどれだけ克服できたでしょう。少なくとも須佐之男に擬される地方の人は、特に高知市などの地方都市以外の、いわゆる田舎と呼ばれる地域の人は、一見荒ぶる言動に擬されるものの中に潜む「人への愛情」をどのくらい表せるかを学ばねばなりません。また都会人も「郷」に入れば、その郷なりの愛情の表し方があるということを深く理解するよう努めなければなりません。私の郷里「高知」は台風銀座といわれ、まさに台風の国、すなわち須佐之男の国です。その国が豊かな人間性で満たされることを心から念願するものです。

(カルチクラシー経済学研究会
旧CI建築研究会・理事長)

第四十七回高知市展が終わって

大平武夫

文化高知No65(五月号)の鍵岡県立美術館長の「地域の文化にパワーを」を拝読した。「アンデパンダンこそ、新しい芸術創造と表現に最もふさわしいと思いついていた僕は、市展に大いに期待した。しかし、残念なことに……せつかくのアンパン方式が生きていない。どこかに問題がある、としか考えられない。よきこい祭りに爆発的なエネルギーを放出する若いパワー、あのパワーこそ高知市展の場で発揮されることを願う」というものである。

折しも、これを拝見する数日前に高知市社会教育課の森尾課長さんと「これからの市展は、見る側と出品する側双方に、より親しみと愛情をもってもらえる中身づくりが課題となるのでは」ということを話したばかりであり、鍵岡館長のいわれるままには、なかなか時間が掛かると思った。

○古いカラーを脱ぎ鎖を離れて各自の歩幅で生き生きと市民生活を楽しむ、それが個性につながる

○個性が芸術や文化の花を開かせ、街や国を浮揚させる

○市展はアンデパンダンらしくのびのびして全員参加、全員主役でなければならぬ

○欠点を欠点と思わずに、自分の特徴だと考えること

○古いカラーを脱ぎ鎖を離れて各自の歩幅で生き生きと市民生活を楽しむ、それが個性につながる

○個性が芸術や文化の花を開かせ、街や国を浮揚させる

○市展はアンデパンダンらしくのびのびして全員参加、全員主役でなければならぬ

○欠点を欠点と思わずに、自分の特徴だと考えること



○会場は作品の容れ物ではなく芸術作品を見せるところである。壁面を贅沢に使えないという側面も忘れてはならない

○私としては、これからの市展には高齢者の方々のいきいきとした作品がたくさん出品されると同時に、若い方々の意欲的実験的作品が出品されることで「市展の若返り」ができる

五月二十八日を
もって第四十七回
展も閉幕した。

文化施設の建設に当たっては市民側の要望を十分聞いてという市長の希望があった、「市展委員会」と「つくる会」ではそれぞれ構想委員を選出して基本構想を練り上げ八月中旬に市当局へ「意見と要望のまとめ」として提出する計画である。これはあくまでも市当局が立案するであろう基本構想の中へ組み込んでもらいたい要望ではあるが、われわれの意見を汲み取っていただきたいものである。

市展の委員会がこのような活動を自主的に進めた経験はかつて無く、いろいろ困難もあるが是非とも実現したいものである。

「市民ギャラリー運動」を正面にすえて発足した「ギャラリーをつくる会」では、市内病院長の伊野部先生から、「運動が実現するまでリハビリ室をギャラリーに使い」という有り難いお話をいただき、「ギャラリー上四ボラ会館」の誕生を見た。以来この運動の拠点として利用させていただくかたわら、グループ展や個展でも成果をあげている。

「市民ギャラリー運動」を正面にすえて発足した「ギャラリーをつくる会」では、市内病院長の伊野部先生から、「運動が実現するまでリハビリ室をギャラリーに使い」という有り難いお話をいただき、「ギャラリー上四ボラ会館」の誕生を見た。以来この運動の拠点として利用させていただくかたわら、グループ展や個展でも成果をあげている。

「市民ギャラリー運動」を正面にすえて発足した「ギャラリーをつくる会」では、市内病院長の伊野部先生から、「運動が実現するまでリハビリ室をギャラリーに使い」という有り難いお話をいただき、「ギャラリー上四ボラ会館」の誕生を見た。以来この運動の拠点として利用させていただくかたわら、グループ展や個展でも成果をあげている。



中央からの講師は、ペン字・写真・日本画・書道・洋画の五部門だったがそれぞれに成果をあげることができた。

洋画では絹谷幸二氏(東京芸大教授・独立美術協会会員)のスライド作品による抽出作品批評に続いて、「愛は芸術なり」というお話をお聞



たいと話している。

運動の経過では、○郷土文化会館をのこす運動 ○県立美術館利用上の問題点 ○高知市の都市計画・文化施設等多岐にわたるが、人口三十二万の高知市では美術館やギャラリーの施設は当然必要で、私達の運動は遅すぎたのかもしれない。

問題の構想委員は八名で、すでに第四回目の討議を深めたところである。この会では市当局との懇談や会員のアンケート調査も近く行うよう準備をすすめている。

(高知市展代表委員長)

酔星の版画家——日和崎尊夫

——その詩人的側面—— ②

坂本 稔

前回紹介した「航海」は、日和崎尊夫の芸術家としての旅立ちの宣言であり、「瞳」は、航海途上の休息のひとときの叙情であろう。今回の「無題」は新しい土地を発見し得た喜びの歌であり、最後の「雲」は、己の航海の終わりを静かに見つめる魂の絵図である。

無題

たとえその星が
どんなに微小な存在であったにしろ
無限の宇宙で燃え尽きて
その虚空を引き裂こうとする時
何ものかの共感を呼びさますだろ
う
深海の魚、貝類の魂
あるいは青空の風にゆれる
草花の生命の中に

一九七四年から翌年にかけて、彼は文化庁芸術家在外研修員としてヨーロッパに渡り、専門の研究に明け暮れることになるのだが、主としてパリに滞在、昼間は国立図書館で木版画集を閲覧、夜はアラブ人の経営する居酒屋などでアフリカ各地からやって来た労働者と一緒に酒を飲んで遊ぶという暮らしぶりであったらしい。私は帰国後の彼からモロッコ人と腕相撲をやつて勝つたという話を聞いたことがある。

それはともかく、この時期というのは、彼の生涯の画業のメイン・テーマであった「KALPA」の連作

期のほぼ中間に当たる。初期の詩文集『星と舟の唄』あたりの作品に早くも現れている「星」と「宇宙」への深い関心が、次第に哲学的考察の深みを加えて、無限の宇宙的時空と自己とを対比しながら、独自の詩人的直観によってすべての存在の謎に迫ろうとする激しい意志に導かれて

雨

雨かふっている

魂の言葉がつかつかく悲しみのように

朽ちた板壁に――

薄いとタン屋板に――

まるで残り少ない生命を刻むよう

永遠のうちに誘うよう

いまは去ってしまつた灼熱の風

それははるか彼方、

On the way

一瞬のうちに散つてしまつた花のよう

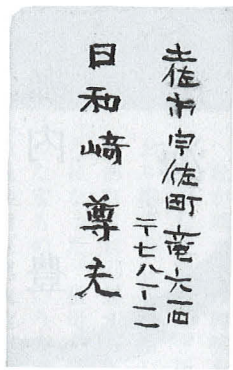
……

雲

いまは亡い
ぼくの愛した
友や
肉親や
画家たち詩人たちは
は何処に行つただらう
冬の朝
病室のベットの上で
雲をながめていると、
彼等はぼくの心の中の
森や山や川や海の
それぞれに似合った住家に居て
それぞれの仕事に精出しているの
がみえる

ぼくの仕事は孤高だが、
僕の人生は
孤独ではない
生きてる限り
彼等が仲間だ

この詩は平成四年の一月十五日成人の日に書かれ、詩誌「オリーザ」(吉本青司編集)に発表されたもので、この画家の絶筆と思われる作品である。



日和崎尊夫手作りの名刺

を眺めながら、画家は自分の生涯で出会い、そして死に別れて行つた人達の上に静かな思いを馳せている。ここに至つて彼は、明らかに自己の死期の近いことを予感し、死の恐怖を乗り越えて穏やかな諦念の境地に

アトリエ「白椿荘」と日和崎尊夫専属の摺り師・前島国長氏。中央の木は前島氏手植えのオガタマの木。(筆者撮影)

入ろうとしているかのようである。

若き日、命運の星に導かれながら「航海」に出たひとりの天才的版画家が凄絶な風をくぐり抜けて漂流の果て、最後にたどり着いた平安の港で今は亡き自分の愛した友、肉親、そして画家や詩人たちに邂逅し、己の「航海」の終わりの時を心静かに迎えている。

「僕の人生は孤独ではない」という確信に満ちた宣言は、日和崎尊夫の人間世界への限らない愛着と信頼を物語っていて、生前の彼

制作された作品が次々と発表されていく時期である。

この八行の詩には、一人の芸術家が苦悩と模索の果てに自己の制作の根柢を明確に認識し得たという確信が、実に爽やかに表現されている。

日和崎尊夫最盛期の勝利宣言であり、自己発見の歌でもある。

日和崎尊夫手稿(詩) 1968年

の酒乱ぶりには眉をひそめながらも、どこか憎めないヤンチャ坊主的な性格を愛していた周囲の人々の心をしんみりとさせるのではあるまいか。

この詩を書いたから三ヶ月半の後、平成四年四月二十九日、酒を起爆剤として自己燃焼の限りを続け、軌道を外れて天から落つちて来た酔いどれ彗星のようにこの世を渦巻きながら駆け抜けて行つた画家・日和崎尊夫は、わが国版画界に不滅の軌跡を遺して昇天して行つた。享年五十歳であった。

(未完)

(日本詩人クラブ会員)

《付記》

一、平成七年四月二十九日、日和崎尊夫の三回目の命日に、星ヶ岡アートヴィレッジにおいて生前の画家を偲ぶ仲間たちによって第一回の「白椿祭」が開催された。アートリエ「白椿荘」にちなんでの命名である。

二、日和崎尊夫に関するエッセイではその高弟でわが国木口木版画界の第一人者である柄澤齊氏の「星より近き」が特に光芒をはなっている。(随筆集『銀河の棺』小沢書店刊に収録)

三、七月九日より八月十六日まで県立美術館にて「日和崎尊夫木口木版画の世界」開催。

人生・一幕の舞台

堀内 豊

冬の海



ある日、ある時、四、五人で雑談をしたあとで、『海から連想するものは何かね』と訊いたことがある。

答えてくれたのは三十代から四十代にかけての男性だった。『青い色彩』『廣大』『小さな地球』と、さまざまに回答だった。なかのひとり、『海の向うにある別の国』であり、『母』だと答えてくれた。彼がいうのには『母が子どもに対する抱擁力を海に感じるから』

かしらないが、かならずはなしの終わりに、『……龍の波切不動

尊(土佐市宇佐町龍・四国霊場第三十六番札所・青龍寺)へ行く途中の色見橋から下をのぞくと、海の底に宝ものがあつて、冬の晩はキラキラ光るそうで、それを獲りにいきよつたら、得物がしれない怪物に攫われるそうやから、おまさんも大人になって、行てみたいと思つたらいかんぞね。それだけは言うちよくぞね……』と、同じ話しを何度も聞かされた。私が郷土史に興味をもちだした頃から、折おり祖母のむかし話をあれこれ幻想するようになった。祖母が言った宝ものというのは、白鳳の南海道大地震のときに、宇佐湾の南方で陥没した陸地の人が、それぞれ大切に保存していた器物のひとつではなかったろうかと、飛躍した想像をするこ

であった。私は、『君、海を母と呼ぶのは、三好達治の詩にあるが、その詩を知っていたかね』と、たずねたら、『いいえ、いっこう知らないです』といった。その晩、私は三好達治の詩集『測量船』を読みかえした。

蝶のやうな私の郷愁……。蝶はいくつか籬を越え、午後の街角に海を見る……。私は壁に海を聴く……。私は本を閉ぢる。私は壁に凭れる。隣りの部屋で二時が打つ。『海、遠い海よ!』と私は紙にしたためる。

——海よ、僕らの使ふ文字では、お前の中に母がある。そして母よ、仏蘭西人の言葉では、あなたの中に海がある。(郷愁)

ところで私が海からの連想を訊いた日の夕方、ある女性に同じ質問をなげかけたら、

『そうね、ちいさい頃でしたが、母に連れられて田野町へ行った途中で、大山岬まで来たときに、落日が夕映えて、海を紅く染めているのを見たわ。海を想うときは、そのときの綺麗な海の景色と、母のことがしきりに思い出されてたまらないの……』

と、答えてくれた。私はたぶん季節は冬だったろう、と勝手に決めこ

とがある。

さらにまた、幻想は遣唐使の時代に及ぶ。

船団を組んで荒海を渡る遣唐使のさまざまな姿態が、まるで絵物語りのように眼前に浮かぶが、それは一瞬のうちに花吹雪のように乱舞して、たちまち視界から消える。

その光景は、冬の荒海に翻弄されて、必死に救助を求める遣唐使たちの末期のすがたであった。

事実、今から千二百余年まえの宝亀九(七七八)年に、遣唐使の役目を終えた七七八名が、四隻に分かれて帰国する途中、第一船が薩摩(鹿児島県)の出水沖で遭難した。船は漂流をつづけているうちに土佐湾で難破して、乗組員全員は生死不明となった。このことは、都へ報告された記録に残っている。

ここで想像をたくましくすると——。遣唐使が帰国するに当たつて、乗組員のそれぞれは唐国の産物を土産品として、船積みしたことが考えられる。すると、それらの財宝、装具などのことごとくは、人もろともに海底に沈み、やがて時を経て宇佐湾に流れこみ、財宝、装具のいくつかが、色見橋の下の暗礁にまぎれこんで……と、いつかの祖母のはなしとむすびつけて、恣意的に古代絵巻を描いてみるのだが……。

んだ。

彼女が語ってくれた落日と海。その淡い映像は、いつのまにか私をふるさとの冬の海辺へ運んでくれた。

——渚に佇んでじーっと目をつむると、幻の島が浮かんでくる。白い波がしらすと冴えた藍青いろの向うで、蜃気楼のように陸地がひろがり、宇佐湾(土佐市宇佐)をさえぎっている。波浪はたえまなく沈黙の島の岩肌を洗っている……。

ときにそんな幻視が現れたあとには、不思議と私の気持ちはやすらかなになる。私にとって、海の連想は「幻の島」である。

幻の島をときどき夢見るようになったのは、考えてみれば、少年時代の記憶が深層意識にべったり貼りついているからだと思う。

もの心ついたころ、潮騒がおもたくなだれこんでくるような冬の夜、祖母から聞いたむかしはなしが、いつとはなしに私のなかに、幻の島として定着してしまったようだ。

今から千三百年むかしの白鳳十(三六八四)年に、宇佐湾の南部に陸地があった。この年の十月十四日、突如として大地震が起こった。陸地は陥没して、土佐湾の潮流に呑みこまれた。

そのはなしを祖母は誰から聞いた

しかし、もつと残酷な想像は、中世紀から近世にかけて、岬に近い小さな漁村で起こった出来事である。季節風の強い冬の海上を、陸地をもとめてさまよう遭難船が、岬に接近したあたりでかがり火を発見して、船首を陸地に向けた数刻のちに、暗い波間の岩礁に船体をぶつつけて、やがて荒れ狂う波濤に巻きこまれて、龍骨も無惨にこわれてしまう。

翌朝、難破船に積みこまれていた食糧、雑貨品などが渚に漂着し、漁村の貧しい人びとがそれらをあさつて、めいめい家路へ急ぐ……。

かがり火は、籤引きで決まった数名の村びとが、船を難破さすために故意に焚いたものであった。この残酷な出来事に、祖母がはなしてくれた色見橋の下で光る物体をオーバーラップしてみたが、しかし、光る物体が冬の海に耀ぶ夜光虫であるとすれば、まことに興ざめた話で終わるが……。

ともあれ、私はこの冬、宇佐(土佐市宇佐町)へ帰つてひさしぶりに海をながめた。千差万別の表情で天に對している海。その海の冷たさと暖かさなどをあれこれ考えてみたが、やはりだまって海を見詰めていたほうが、いいようである。

(高知県地方職業安定審議会委員)

皆さん、よろしく

お願いします

井坂 聡

私が初めて高知を訪れたのは、今から十五年ぐらい前、大学三年の時でした。友人の親戚を頼って、正月旅行の折りに立ち寄ったのです。

その時一番驚いたのはお酒の量。高知の人は酒飲み、とは聞いていましたが、見ると聞くでは大違い。私も大学の運動部に在籍していたので少々の飲み方ではびっくりしないうつもりでいましたが、次から次へとつがれる酒には本当に面食らいました。二日酔いガンガンの朝飯にまずビール、桂浜ヘドライブに行って昼飯でまたビール、日が暮ればビールに日本酒、ウイスキーと殆ど粕漬け状態。正気を失った私は夜中に友人たちの前で、当時付き合っていた女性のことをペラペラ喋ったらしく、翌朝みんなにニヤニヤと冷やかされたのを覚えています。(断っておき

ますが閨房の秘め事を語ったわけではありません。私は非常にオク手でそんな事はまだシテいなかったのです)

二度目に高知を訪れたのは十二年前、映画の世界に入って、半年目のことでした。

息子の家庭内暴力に手を焼いた両親が、思い余ってその子供を殺してしまう。裁判では情状酌量されて執行猶予となるが、母親は罪の意識にさいなまれて精神にも異常をきたして、とうとう自殺をしようとする、という実話に基づくテレビドラマの仕事でした。

もつとも高知での撮影は、妻と息子の供養のために遍路姿となって歩く父親の姿を撮る一カット。予算のないテレビでは撮影も当然一日だけ。それも、大阪を夜の八時に出港する

フェリーに乗って、高知に着くのが朝の六時半。撮影を終えてその日の最終の飛行機で東京に戻るといって強行軍。やたらと長い石段を、機材を取りに何回か走って上り下りさせられたことが撮影の唯一の思い出です。そんな私が高知と本格的に係わりだしたのは二年前。春野町出身の田島征三さんの『絵の中のぼくの村』という、彼の子供時代の思い出を描いたエッセイを映画化しようということになって、私が先行準備で派遣されたときからです。

プロデューサーから最初に会いに行くように、と言われたのは自主上映運動などでお世話になったというGさん。私がお会いしたことはなかったのですが、高知の人の飲みっぷりは強烈に記憶していました。なので、酒飲みの期待半分、初日からつぶされてしまったらどうしよう、という不安が入り交った思いで彼の勤める病院に挨拶に行きました。ところが、ちょっと待って下さいと小さな部屋に案内され、暇つぶしにと手渡された雑誌をパラパラをめくると目に入ってきた文字は「断酒のすすめ」……私はいくつしてアルコール依存症から立ち直った」

ハッと改めて周りを見回すと、本棚中、その手の書物とビデオだ

貧しい所だ、と自分たちの村に全然自信を持ってないんです。だけど、もし映画のロケが来てくれて、シーンでも二シーンでも村内で撮影をしてもえれば、吾北村には、よそには絶対ないこんな素晴らしいところがあるんだぞ、と誇りを取り戻すことが出来るんじゃないかと思ってるんです。

二年前、資金繰りその他の理由で一度はつぶれかけた映画『絵の中のぼくの村』ですが、この夏ようやく撮影に入ることが出来そうです。この間、前述の『N』の常連さんや吾北村のTさん、その他にも春野町役場のTさんなど沢山の人が、陰になり陽になって私たちを支え、応援して下さいました。そのおかげで映画が実現したようなものです。

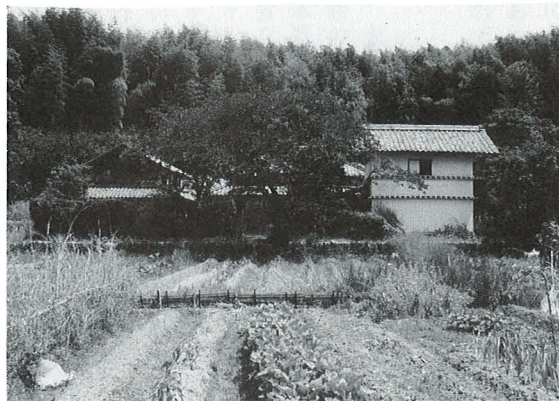
文化とは、つきつめていけば、人と人とのふれあいだと私は思います。作品が完成した時に、高知の人達が「この映画、高知でとれてよかったね」と言ってくれたら、こんなに幸せなことはありません。映画作りは文化活動だ、と胸をはれるのはその時です。

選挙の決まり文句ではありませんが、高知の皆さん、今年の夏はお騒がせしますが、映画『絵の中のぼくの村』をどうかよろしく願います。

(映画製作会社シグロ・助監督)



主人公の通う小学校(ロケ予定地・吾北村清水第二小学校)



主人公の家(ロケ予定地・春野町芳原馬路の民家)

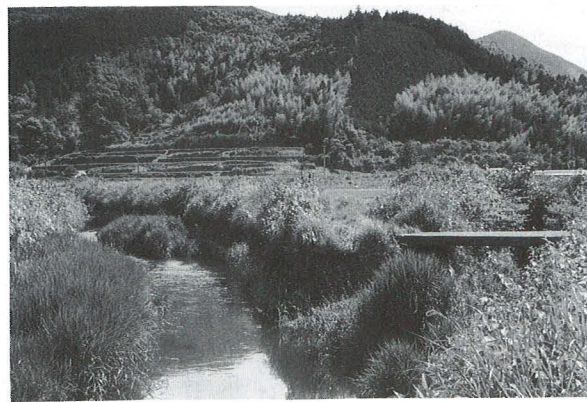
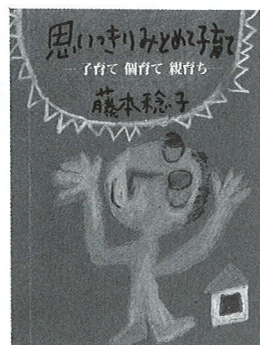
しい栗焼酎と高知の人のもう一つ語られる特色、情の厚さ。癖の強い常連のお客さんたちが、私の「これこれこういう映画を作りたいんですが……」という言葉にじっと耳を傾け、「よし分かった。手伝っちゃる」とばかりに実に色々な事を教えてくれるのです。それも一人や二人ではなく、居合わせる人達みんながそうなのです。私の高知の人脈、情報網はほとんどこの店で作られた、と言ってよいと思います。

思いつきりみとめて子育て

——子育て 個育て 親育ち——

藤本 稔子著 四六判・並製本・352頁・定価1,600円

三十八年の豊かな保育経験をもつ元園長がつづる素顔の子どもたち。子どもを知り、愛し、認め、働きかけをするなかで、どの子ども大きく伸びていく。



主人公たちが遊ぶ小川(ロケ予定地・日高村沖名)

らけ。後で知ったのですが、その病院は『日本断酒連盟』発祥の地だというではありませんか。その夜、Gさんに食事を御馳走になり、気にせずやってくださいますとお酒も勧められました。これはホテルに帰って一人で飲み直すとするか、と思っていた矢先に、もう一軒だけ高知の色々面白い連中が集まる店があるから紹介がてら行きましょうと誘われたのです。それが今では高知にいる時は殆ど欠かさず通っている『N』という店でした。

『N』で私が味わったのは、おい

紫式部の造った男たち [II]

光源氏

藤田 加代



前の世にも、御契りや深かりけん、世になくきよらなる玉の男皇子さへ生まれたまひぬ。

今生の契りだけでなく、二世の深い宿縁の中から生を受けたという、この「玉の男皇子」が源氏物語正編の主人公に成長します。桐壺更衣を母とする、桐壺帝の第二皇子。「光」に象徴される理想性を生来の資質として持っています。臣籍に下って源氏となり、多くの女性と交渉を持って、後には太上天皇に准ずる位を得て栄華を極めた、物語の人物中の人物です。そして「光源氏」と呼ばれるこの人物は、「世になくきよらなる玉」の美質を加えて、誕生時から超人的と言ってもよい卓抜な魅力を示すのです。

ところで「玉」「光る」という美質は、かぐや姫や宇津保物語の主要人物のように、もともと源氏物語に先行する古物語の人物の資質で、並の人間のさまではありませんでした。古物語において、理想の主人公と言えば、「玉」「光る」と表現するしかない定番の存在で、読者の夢や憧憬を寄せる至上の人物だったのです。「玉」「光る」人物の系譜を遡れば、そこには神々がいるという具合に、

「光君」と渾名されるこの「玉の男皇子」は、絶対の理想性を背負っていたのです。

しかし源氏の「光る」イメージは、実は、闇と表裏一体に形象されます。それは、藤壺腹の皇子（後の冷泉帝・源氏の実子）の誕生に際して、桐壺帝が言った「傷なき玉」という言葉と対応させるとよく分かるので、この皇子に対して光源氏は「傷ある玉」であり、「闇を抱き込んだ光」としての主人公でありました。そしてそれは、既に玄宗と楊貴妃の例を挙げて非難され、破滅が予見されていた、反社会的熱愛から誕生した主人公の必然の生の形だったのでしょう。

七歳にして源氏は、「帝王の上なき位にのほる」相があるが、そうならば国が乱れ民が憂う、との予言を得ます。青年期に至り、藤壺との密会后、この人は帝の父になるはずだが、「その中に違ひ目」があつて、苛酷な人生の蹉跎を経験する、との夢解きの言葉に接します。源氏物語第一部と言われる部分は、これらの予言を大枠にして光源氏の運命が語られます。予言をなぞりながら、苛

酷で危うい人生の苦難を経て、彼がいかに王権に近付くか、これが「闇を抱き込んだ」「光る玉」の宿世物語だったのです。藤壺との不義の恋も、幼時に失った母を恋う思慕と憧憬に端を発した情熱の衝動に見えますが、実は、帝の父になる源氏の運命物語にとって、それは必須の構想でした。

光源氏の、この「闇を抱き込んだ光」のありようは、しかし、彼の宿世物語の部分にだけ見られる様相ではありません。生々しい人間として源氏物語世界に生きた、彼の全生涯を浸す悲しみとして、むしろそれは深々と語られるのです。

源氏物語第二部、源氏の晩年を語る若菜下巻と幻巻に彼自身の述懐が見られます。それによれば源氏は、現世における身分・地位・権力・富・社会的信望等、何一つ不足なき「我」を自認しています。それでいて、「世にすぐれて悲しき目」を見る点で人に抜きんできた自分は、「口惜しき契り」ある身かと、我とわが生涯を見通すのです。つまり光源氏の運命が、薄氷を踏むような危機を辛うじて回避し、苦難を克服しながら栄華の極に達したものであるだけでなく、彼の光り輝く全生涯が、常

に人間としての憂愁と悲哀とともにあつた、というように語られているのです。



光源氏が、理想化された古物語の主人公たちに似て、しかも本質的に異なる点は、超人的美質を持った主人公が、一人の生々しい人間として平安朝の現実を生きた、という造型になっているところでしょう。この造型は随分と新鮮で、理想化された人物でありながら、必ずしも恋の英雄ではなかった光源氏のありようを、不思議に鮮明にあり出すことにもなるのです。むしろ野暮で、引き時を失つてはのめり込み、その都度「人やりならぬ」嘆きを抱え込む恋愛主体としての光源氏は、かなり不様で、それだけにひどく人間的でもあるのです。源氏物語が、伝奇的な宿世物語の皮袋に、驚くほど生々しい人間の物語という酒を盛り込むことができた理由も、このあたりにあるのではないでしようか。



それにしても光源氏は、一つの人物に一つの性格が宿るような、すつ

きりと統一された造型ではありませんが、「なまめかしく」「女にて見奉らまほし」と描かれる女つぼさを持つているかと思うと、傲岸ごうがんでしたたかな男の顔があります。外聞を恐れて

「まろは皆人に許されれば」と強引に迫る「あやにくなる御癖」があります。藤壺へのひたむきな慕情と並行して、「雨夜の品定め」に触発された恋の忍び歩きが存在します。何よりも、彼を押し潰そうとする体制に挑戦する人間像と、体制の中核に君臨する人間像が、ともに光源氏の姿でもあるのです。子息夕霧の教育に見られる成熟した父性と、終生引きずり続けたマザーコンプレックスや「紫のゆかり」への愛着も、奇妙に源氏の中に同居するのです。



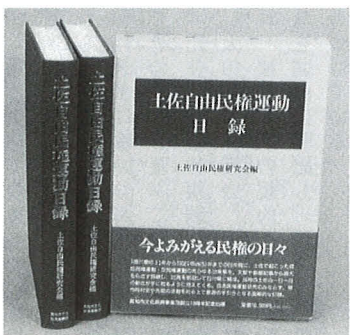
「まめだち」ながら、どこから言葉を取り出すのか、「あはれ知るばかり情々しくのたまひ尽く」して口説く一面があります。女の心理に添う細やかさ優しさを見せる一方で、

光源氏とは、と聞かれれば、これらの矛盾を含んだ多様なありようの総体だ、と答えるほかりません。物語世界との関係において見せる光源氏のこうした多様性は、これが人間というものの生けるさまか——という思いを誘います。今回は、親友でありライバルでもあった頭中将との比較において、男女の関わりに精神性を求める光源氏像に、一歩近づいてみたいと思っています。(高知女子大学保育短期大学教授)

高知市文化振興事業団創立10周年記念出版

土佐自由民権運動 日録

土佐自由民権研究会編
B5判・上製本・函入り 496頁
定価10,000円(税込)



苦悩する現代山村 (5)

大野 晃

人口、戸数の激減と高齢化の急速な進行によって限界集落が増加しつつある「スギ・ヒノキの人工林型山村」は、いま田畑、山林などの地域資源の管理機能を大きく低下させ「山」の荒廃が進んでいる。高知の山村では、集落を去るとき、めぐら地にスギを植林して出ていくものが多く、田畑の耕作放棄地と植林化で農地が減少し「山林」が増えている。しかし、この山林が管理されないまま荒れているのが現状で、特に不在地主の山林の荒れが目につく。

きな問題になっている。かつて広葉樹に覆われていた山が戦後の燃料革命のなか国が勧めてきた人工林化政策でスギ山に変わり、これが外材圧迫による林業不振で手入れされないまま放置林となり、この山の荒廃が山そのものの自然環境を大きく後退させてきている。九三年五月、私は大豊町八十五集落の全区長に「スギ・ヒノキの人工林化で山の環境が変わった点」に関するアンケート調査を実施した。いま、その調査結果の概要を紹介すれば、「変わった点」の第一に「猿、猪、ハクビシンなどが畑の作物を荒らすようになった」点を挙げ、次いで「野鳥の数や種類が減ってきた」と答えている。更に「沢の水が枯れたり細くなってきた」点を心配し、保水力のなくなってきた山が「鉄砲水」をよび、「沢の川底を変えエビ、カニ、川魚の棲家を奪い」、手

が入らず下草も生えない山の荒れが「部分的林地崩壊」を招いていることを指摘している（土佐町や仁淀村でもこの調査を実施したが大豊町と同様の結果が指摘されている）。また、広葉樹に覆われていた時代には水が豊富で田の引き水に困ったことがなかった峰集落では、山林のみならず田や畑にまでスギが植林され、山に保水力がなくなつたため田に引き水ができないところが処々にあらわれている。加えて、家のすぐ脇にあつた湧き水が枯れ、五百メートル以上ピルパイプを引いて沢から飲料水を確保しなければならなくなつた家もでてきている。この峰集落では田畑にまで植林されたスギが家々を包囲し、年ごとにその輪を縮めてきているので、このまま放置しておけば集落が「スギに喰いつぶされかねない」状況にある。

仁淀村の戸立と太田の二集落は、大豊町の峰集落とは対照的な集落で、田畑への植林化が保水力の低下と農業生産の阻害要因になっていることから植林規制を行い、集落の農地を農地として利用し農業生産の向上に活かし、集落の活性化をはかっている。戸立集落では六七年、十八戸の世帯主全員が「戸立集落ノ住民ハ……田畑ニ森林ノ新植ヲスル事ヲ厳禁スル事誓ヒマス」という契約書に署名捺印し集落全体で農地への植林規制を行っている。また、上組と下組からなる太田集落では上組の田畑と家屋が「スギに喰いつぶされ」下組にまでその包囲が及ぶことに危機感をもつた住民が植林規制を提起。六九年「太田農地保護会」が集落に結成され、植林規制の規約をつくり制限区域を図面に明記し、以来植林規制をつづけている。



第11回写真コンテスト・高知を撮る入賞作品

湖底の学校 藤原 孝一

高知を撮る

私達の子どものころの田舎は、それがそのまま「叙事詩」だった。朝から夜まで、ひがな一日、周囲のみにどりにたつぷりひたつて暮らした。山裂の段々畑ではナスやキュウリや大根などの野菜が作られ、桑畑の隣ではトウモロコシが葉擦れの音を響かせていた。家の前を流れる谷川にはハヤをはじめ小魚がたくさんおり、雨が降った日には、紅色のサワガニがそろそろ庭まで這い上がってきた。泳ぐのは大川で、アユやウナギが豊富にとれた。氏神様の木立には、カシの木や大きなシイの木があつて、そこで毎年ドングリヤシイの実を拾つたことだった。鳥居のそばには、どんな日照りにも枯れない泉があり、喉が渇くとよくそれを飲んで湯きを癒した。夏にはいつもそこにオハグロトンボが羽を休めていたが、子どもたちは水神様のお使いだとして、このトンボだけは捕らなかつた。いまは「共生の時代」だといって、自

原風景



風俗歳時記

然との調和が強調されているが、私たちの子どもときは、「自然」と「人間」が文字通り共生していた。野も、山も、川も、畑も、たんぼも、すべてが遊びの場であり、生活の場であり、人間形成の場であった。ものが成長していく過程を感動をもつて見守るところだった。田舎を離れ街で暮らすようになり、いつの間にかそうした風景も心の底に沈んで、遠いものになつたが、折にふれてそれを思い出し、記憶を鮮明にする。故郷の心象はなかなか風化しない。だからこそ「原風景」と呼べるのだと思う。そしていま、幼い日々にかうした環境に育つたことの有り難さを、しみじみと思つたのである。いまの子どもたちは、自然と縁遠いものになつていく。それはそれで致し方ないことも知れないが、この子どもたちが大人になつたとき、その胸奥にはどういふ原風景のこころとだろ。 (晋)

ちよつと異色、らしいです

島崎 章

「土佐高OBバンド」

一九九〇年、母校創立七十周年を記念して行われた現役部員のコンサートでの合同演奏をきっかけに生まれた土佐高OBバンド。翌年からコンサートを開き、今秋、五回目を予定しています。

OBの半数以上が県外在住ということで、参加者は限られており、高知在住のメンバーが日常活動をしながら、年一回のコンサートには全国のOBに呼び掛ける、といった方法をとっています。

ところで、私たちのバンドは吹奏楽部OB会の諸活動の一環であり、OB会の事務局も兼ねています。ですから、OB会員への通信や懇親の場づくり、現役の吹奏楽部員との交流や支援なども行っています。そうした経費は、ほとんどOBバンドのいわゆる営業活動（イベント出演やパーティ出演など）の収益で賄っています。幸い、とっていいのかどうか、



「YELLOW MATTER CUSTARD」

長い名前でも再スタート

山本 健清

同じ高校でグループを組んでいた音楽仲間も、卒業とともに進学、就職と離ればなれになっていきましたが、声をかけあっていつしかまた一緒に練習するようになり、今から三年前少々長い名前でも再スタートしました。

最近のバンド名は短いものが多く、「ミスター・チルドレン」の「ミスター」のようにイニシャル的なものも多いのですが、私たちはこうした流れに敢えて逆らい、ビートルズの曲の中から歌詞の一部を拝借して、バンド名を決定しました。



「イエロー・マター・カスタード」
今ではすっかり馴染んで、愛着さえ感じるようになっていきました。
練習は土曜日の夜、個人のスタジオをお借りしてやっています。
ごく最近、個性的なボーカルがメンバー

「愚か者の集い」

自由と幸福を求めて

川上万利子

人は何をどのように食べたらいいのか。それはなぜか。このようなことに関心をもった人が実際に食物や食べ方を変えてみたら、どんな体に変化して精神まで変わった。そんな体験をした者が集まっています。

周囲の人と少々異なる食生活なので、一人ではくじける、変人扱いされる、おつき合いに支障をきたす、などの問題が当然発生します。
初めはそれらの経験の分かち合いや情報交換の場として出発しました。

毎週木曜日八時半からのミーティングの内容は食生活にとどまらず、宇宙の秩序・命という視点からみた生き方の問題に広がってきています。

自由と幸福への道を求める人はどなたでも参加できます。お待ちしております。

活動は

定例ミーティングの他に、次のようなものがあります。
「砂もぐり」海辺の砂に埋まり体毒を排出す



高知市文化振興事業団編

A5判 二六〇頁
定価 二、〇〇〇円

高知のエスプリ

A5判 二五二頁
定価 一、〇〇〇円

高知県環境会議編
（高知レポート）

A5判 二五二頁
定価 一、〇〇〇円

森林と林業の再生

A5判 二六八頁
定価 一、二〇〇円

山本 大著
幕末の青春 坂本龍馬の生涯

四六判 二六八頁
定価 一、二〇〇円

依光 裕編著
珍聞土佐物語 上下巻

四六判 三九二頁
四〇八頁
定価 一、六〇〇円

鈴木文彦・井正人・関根猪一郎著
（高知レポート）

A5判 二二六頁
定価 一、〇〇〇円

清達幸男著（高知レポート）

A5判 二二二頁
定価 一、〇〇〇円

高知県の工業

A5判 二二二頁
定価 一、〇〇〇円

外崎光広著
土佐自由民権運動史

A5判 四四四頁
定価 二、八〇〇円

外崎光広編
土佐自由民権資料集

A5判 三四四頁
定価 三、〇九〇円

今井嘉彦著（高知レポート）

A5判 一〇八頁
定価 一、〇三〇円

河川はよみがえるか

A5判 一〇八頁
定価 一、〇三〇円

岡林清水著
高知県文学散歩

四六判 二七八頁
定価 一、八〇〇円

高知の文化を考える会編
高知の文化を考える

A5判 一八八頁
定価 一、二〇〇円

る
「森林浴」
「グリーンゲリヤ」福岡正信さん流の粘土団子ばらまき作戦
「手当法実践」自分で体の調子を整えるための簡単な方法（足湯・生姜シップ）
「パーティィー」未精製穀物、野菜が素材の農薬や化学調味料、砂糖を遠ざけた料理
どの活動も会則や義務はありません。
メンバーは自らの責任において参加できるものに参加しています。

高知市文化振興事業団編 わがまち百景	A5判 二二四頁 定価 一、二〇〇円
筒井広道著 画帳の歳月	A5判 二五六頁 定価 二、〇〇〇円
土居重俊・浜田敦義編 高知県方言辞典	A5判 七三六頁 定価 六、一八〇円
高木啓天著 土佐の芸能	B5変 三四六頁 定価 四、九四四円

伝統的に土佐高吹奏楽部は現役時代からジャズやフュージョン、ポップスの傾向が強く、いろんなステージがこなせる異色なバンドということで、声をかけていただく機会も多いようです。
私たちのバンドも、他の多くのOBバンド同様、他校のOBにもメンバーに入ってもらっています。そういった意味でも、今後ともさまざまなOB・市民バンドの皆さんとの交流も活発に行っていきたいと思っています。

連絡先 高知市旭町二二二一〇
電話 〇八八八七五六一六〇三〇

ーに加わったことで、古い？ものが刺激を受けて、練習にさらに力が入っています。また、この夏にはさまざまなコンテストが開催される予定で、私たちはそれに向けて現在、デモテープ作りをしています。
こうしたコンテストで力を試し、また色んな刺激を受けることで、技術の向上につなげていきたいと思っています。
とにかく、音楽が本当に好きなメンバーばかりのバンドグループです。

連絡先 高知市鴨部五六四一〇一
電話 〇八八八四四一四四六六

散歩の途中で



造船などの工場群が立ち並ぶ海辺に接した種崎北端の一角。瓦屋根に葎風の装い、センスの良い新築の民家？ではありません。集中豪雨時の浸水対策に力を発揮する排水ポンプを収める防災施設。ひとさわり目立って楽しませてくれます。

風伯

一句・六百字

この六百字のコラムを最初に書いたとき、一千字ほどの下書を縮めるのに四苦八苦した。仕事柄よく挨拶文を書かされるが、これがおよそ八百から一千字の範囲のものだ。その程度の量で余分なところを削れば、との思いで引き受けたのがいけなかった。

書いている間に分かってきたことの一つ

が文体だった。六百字には六百字の文体がある。長い文章の一部では何となく散漫だ。最初の一行から機能的な文体が、乗用車のスタートではなく、バイクの発進が必要のようだ。

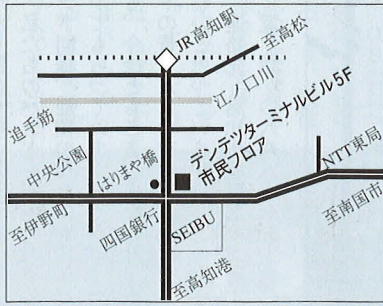
次に気付いたのは、六百字には六百字のテーマ、発想があるということだった。何

千字のエッセイやレポートの題材を部分的に借用しても中途半端で終わってしまう。あくまでも制限字数の中で完結するテーマである方がよい。短詩形の文章と同じ感覚で、十七文字や三十一文字と六百字の違いに過ぎないと考えることにした。
そうしてみると、日常に出会う様々な事象や思い浮かぶ事々の中で、これは六百字のものだな、と感じるようになってくる。そこで書き始めると、下書の段階から丁度その範囲に納まってしまうのだ。
あるテーマを思いついて、六百字の発想だと思った途端に、そのこと自体もまた六百字になるのだ、と気付いた。だが、あまり調子に乗り過ぎると川柳一句をひねって政治評論家になったつもりのごこの御隠居さんと同じにはいらないかと、ちよつと心配だ。（南北）

市民フロアのご利用を

展示や会議に最適！

広さ・内装 96㎡壁面布クロス張り、
スポットライト完備
所在地 高知市はりまや町
一―五―一・デンテッ
ターミナルビル5階



申し込み (財)高知市文化振興事業団
73-4365

賛助会員募集中!!

会 費
特 典

年額 2,000円

- ① 機関誌「文化高知」を年6回お手元にお届けします。
 - ② 事業団発行の出版物の10%割引 (一部例外あり)
 - ③ 主催事業や刊行物の案内 (マスコミ利用の場合あり)
- [※上記特典は申し込みいただいた日から1カ年有効]

※お申し込み ①郵便振替 ②現金書留 ③直接事業団へ…

いずれの方法でもけっこうです。

新刊

「国際化」時代の山村・農林業問題

再建への模索・高知県からの報告

高知県緑の環境会議山村研究会
鈴木文熹・依光良三・川田勲・飯国芳明 著

A5判・上製本・288頁
定価2,000円(本体1,942円)

内 容

- 第Ⅰ章 第1次山村問題の発現と対応状況：戦後山村の展開状況と危機の深化
- 第Ⅱ章 構造調整下の山村・農林業問題：1.山村における過疎の深化と産業構造の変貌／2.構造調整下の山村農業／3.高知県の林業の現段階と課題
- 第Ⅲ章 第2次解体再編下の高知県の山村：1.西土佐村－住民の自治能力の形成と地域の再生／2.梶原町－農林業の変遷と組織化の新たな展開 3.土佐町－自伐生産と産直住宅の展開の動向／4.物部村－ユズ生産と森林資源の活用を目指す／5.馬路村－国有林経営の変貌とユズ加工品の拡大／6.仁淀村－流域林業システムと「自治体企業」の動向／7.大川村－地域再生にみる住民自治の歴史状況／8.大正町－新たな産業構造の構築を目指して
- 第Ⅳ章 山村再生への模索：「森林・林業化社会」の形成に向けて

「国際化」時代の山村・農林業問題

再建への模索・高知県からの報告

高知県緑の環境会議山村研究会
鈴木文熹・依光良三
川田 勲・飯国芳明 著

危機に立たされる農林業。一層進む環境化・産業化のなかで、わが国のみならず高知県の山村はどう生きていけるのか。国民的課題でもある森林・緑地帯の保持と、その担い手である山村の再生への途程。戦後の状況や農業・林業の現段階、5町村の異断面分析から展開する。

高知市文化振興事業団発行 定価2,000円(本体1,942円)